

平成 20 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題論述

実施時間 [9:00 - 17:00]

課題 II-C, II-D

(10:00 - 15:30)

注意事項

課題 には、[- A]、[- B]、[- C]、[- D]の4題があります。
志望するコースによって、次に示す問題を解答してください。

- ・物理学コース、フロンティアテクノロジーコース：
[- A]、[- B]の両方を解答してください。
- ・人間探求コース：
[- A]、[- B]、[- C]、[- D]の中から2題を選択して解答してください。

[II-C]

今、日本の社会では生まれる子供の数が減少する少子化が進んでいます。少子化は、人口減少の要因となり、また社会における年齢分布を変化させるため、社会保障制度の維持をはじめ各分野に様々な影響を与えていると言われています。この少子化がなぜ進んでいるのか、比較的容易に入手できる資料（別冊子表 1~7、図 1）を使い分析をしてみましょう。なお、文章、数字による答は解答用紙に、グラフによる答はグラフ用紙に解答し、それぞれの用紙に氏名、受験番号、問題番号を記入しなさい。

問 1 表 1 は、女子の年齢別出生率、すなわち女性を年齢別に区分し、各年齢の女性が産んだ子供の数を各年齢の女性人口で割った値の年次推移です。年次推移は、国勢調査が行なわれた 5 年ごとに表してあります。女子の年齢別出生率を 15 歳から 49 歳まで全て足し合わせたものは、1 人の女性が一生の間に産む子供の数の期待値を表し、合計特殊出生率（TFR: Total Fertility Rate）と呼ばれています。この TFR が、少子化の指標としてよく使われています。

表 1 の 2005 年の TFR が空欄になっているので、その値を計算しなさい。計算の際、電卓を用いてもかまいません。

問 2 図 1 は、表 1 における 1965 年、1975 年、1985 年、1995 年、2005 年のデータについて、横軸に女子年齢、縦軸に年齢別出生率をとった折れ線グラフです。このグラフから読み取れる特徴、および TFR の変化との関係について箇条書きにしなさい。

問 3

(1) 問 2 の分析は、少子化の要因について論じる手がかりになると考えられます。さらに別の資料を使って分析してみましょう。表 2 は、母親が第 1 子を出産する平均年齢の年次推移を表したものです。横軸に第 1 子出産平均年齢、縦軸に表 1 における TFR をとって、グラフを作成しなさい。

(2) 問 2 における分析に言及しながら、(1) で作成したグラフより読み取れる特徴と少子化の関連について論じなさい。

問 4

(1) 今度は、年齢とは別の観点から分析してみましょう。表 3 は、世帯人員別一般世帯数、つまり 1 世帯の構成人数別にみた世帯数の年次推移を表したものです。この表から読み取れる特徴、およびその特徴が表 1 における TFR の変化とどのように関係するのかについて箇条書きにしなさい。必要なら、問 2、問 3 を参考に適宜グラフを作成してもかまいません。

(2) (1)の分析をもとに、世帯人員別一般世帯数の変化と少子化の関連について論じなさい。

問 5 日本の少子化の要因についてさらに分析を進めましょう。表 4~7 に、4 つの統計資料を挙げました。これらの資料の中から自由に 1 つ、あるいは複数の資料を選び出し、問 2~4 までの分析、考察を参考にしながら、少子化との関連について論じなさい。必要であれば、グラフを作成し説明に用いてもかまいません。

問 6 これまでは既存の資料をもとに分析を行ないましたが、要因や背景を探るために不足している情報がまだありそうです。分析に必要な情報を 1 つ自分で考えて、その情報を得るための調査方法と分析する手順を述べなさい。調査方法と分析手順は、自分一人のできる規模から、多数の人員を必要とする国政レベルの規模まで自由に想定してもらって構いません。

[II-D]

「流行」や「ブーム」について考えてみましょう。社会では、人びとがいつせいに一致した行動をとることがあります。一致したと言っても、彼らは、一つの目的に向かって協力しあっているわけではありません。流行やブームは、行動のそうした一致の一種であると考えられます。以下のAとBの文章は流行やブームの事例を述べたものであり、そして、Cの文章はそれを理論的に説明しようとしたものです。

A、B、Cの文章を読んで、下記の問1から問4に答えなさい。

A

オックスフォードとケンブリッジでは、カレッジ・スカーフを巻いたり、ブレザー・コートを着るのは、低俗な趣味だ、というのが伝統的な見方だ。しかし、ダイブ・デフィニトリー=ディスガスティング*は大学進学を果たしたのを自慢するあまり、その事実を見せびらかそうとしてカレッジ・スカーフを首に巻き、バッジを付けたブレザーを着込んでいる。また同時に、町の人たちとのつきあいを断ち、自分は「大学の人間」であって、「大学町の一般市民」ではない、ということを感じたての上流階級特有のアクセントで示したがる。

世間の風潮が月並みに随した七〇年代後半には、オックスフォードではカレッジ・スカーフの売れ行きが七倍に増え、バッジ付きブレザー・コートは四倍に増えた。恐らく、「キャンパス・ルック」が流行しているためだろう。あるいは、不確実性の時代に、人びとが主体性を求めているからかもしれないし、ちんぴらスタイルを必死になってまねしようとしている、ザカライアス・アップワード*たちがみんな買い占めてしまったせいかもしれない。

ジョージ・ストウクラット*は遊び相手にイカす女の子をロンドンから呼び寄せるとか、一週間に三時間は、(昔から駄じゃれ遊びのテーマである)地名尻とり遊びのため、地理の本を読むとか、カレッジのビーグル犬と走りまわるとかする。

ジェースン・ヌボーリチャーズ*は、ジョージから辛らつにこきおろされたため、カレッジ・スカーフとバッジ付きブレザー・コートを慈善バザーで処分してしまい、こんどはアヤ織りラシャ地のズボン、ツイードの上着、薄いグリーンチェックのYシャツといったスタイルに変える。それは、ギャンブルの負けを払ってやったジョージより、ずっとスキのない服装に見える。

(J・クーパー、『クラス〜イギリス人の階級』、渡部昇一訳、サンケイ出版、1984年(J.Cooper, *Class*, 1979)より。なお、*はいずれも例として使われている固有の人名である。)

B

明治五年頃、東京市中ににわかにかが殖えはじめた。兎といっても野兎ではない。ペットとして兎を飼うことが大流行したのである。はじめは築地居留地あたりの外人が香港や上海から輸入した珍種の兎をペットとして流していたのが、いつしか兎の大洪水となって

しまったのだ。

これが熱病的にひろがってしまうと、もうとまらない。色変わり、耳変わりが珍重され、市内の待合やお茶屋が集会所に早変わりして、持ち寄りの品評会が催される。そこで、何とかいう兎が去年の三倍の値になったなどという噂が出ると、趣味家同士のやりとりではすまなくなってくる。投機家がとびついた。その筆頭が御一新*で前途の不安をかこっていた旧旗本などの没落士族である。

もともと旧幕時代から旗本たちは、盆栽だの、金魚だの、カナリヤだのの飼養のような、邸内で間に合う副業で台所をやりくりしていた。

弘化四年頃には鶯の啼き合わせ会が流行した。吟調の品格、音の艶、玉結び、声の幅などを鑑査して、最優等のものには賞状が出る。

「そして『優等正の一』という位がつくと、その飼主の得意は非常なもので帰ると直ちに金屏風をめぐらし、金の高蒔絵の鳴台に飾り、客人を招いて祝宴を張ったものである」（日置昌一『話の大事典』名著普及会）。

それくらいのビョーキは経験していたのである。

しかし明治士族の兎飼いにはそんな酔狂の余裕はない。資本をスッてしまえば、明日からは乞食にでもなるほかはない。それだけに必死の力こぶが入り、またそれだけに馬鹿値を呼んだ。なかには色変わりで高く売りつけようとそこらの白兎に柿色の毛染めをして、化けの皮が剥がれたりするひょうきん者まで出る始末。

上田秋成の『諸道聴耳世間猿』にも野良猫の毛を焼いて、麝香猫と称して見世物にした男の話がある。してみると、麝兎づくりの男もそんな故事先例に学んだのかもしれない。

とにかく投機心が異常に高まって、なかには娘を売って兎を買うという不心得者までもがあらわれた。

[中略]

ひどい父親があつたものだが、何しろ一羽が三十～四十円して、最高値は数百円にもなったというから、当時としては家屋敷売り払ってもまかなえないどえらい大金だったのである。何しろ「……珍種珍種と競い、遂に『東花兎全盛』といった番付までが出て、大関だの関脇だのと位がきまって大騒ぎをした。東西の大関は『更紗』と名づけられる種類で、一羽数百円で外国より輸入したものだだったという」（川島房五郎『文明開化東京』光嵐社出版）。ざっと以上のようなきちがい沙汰が横行したのである。

これが突然暴落した。きっかけは、狂乱を見るに見かねた東京府が兎税をかけはじめた措置にある。兎を所持せる者は毎月一羽につき一円を納入すること。無届所持者はその上一羽につき二円の罰金。毎月一羽につき一円の税額は当時としてはべら棒な高額税である。今度はわれ勝ちに兎を手ばなし、川へ流すやら撲殺するやら、蔵前の大道では「しめこなべ」にして一杯十六文で平らげるやら、そうかと思うと柳原土手はすてた兎がうようよして足の踏み場もない有様となった。

路傍にすてられたのは兎ばかりではない。兎の飼い主もすてられた。昨日まで三十円四十円だった兎が、朝起きてみると三銭五銭のすて値に早変わりしている。家財を売り払っ

て都落ちをする者が続出した。士族の商法はやはり手を出さぬが身のためだったのである。

一方、さっさと食い逃げをした利口者もいる。もともと兎流行を煽ったのは「兎の七大名」と称された、前田、戸田、水野、土井、丹波、藤堂、根岸の松平などの旧大名連中である。これら大手の被害はどうだったか。

「旧古河藩主の土井などは華族中での兎もうけの筆頭で、新種でよほどもうけたらしいが、彼はこの布告の出る前にさっと手を引いて、被害が少なかった」（『文明開化東京』）。

いつの世にも大物はその筋からの情報を早手回しに手に入れて、変わり身もあざやかにまんまと逃げおせるのである。一方、娘を売り、なけなしの公債を質に入れて相場を張った下級士族たちは、血の涙を流してこの日を迎えたというお定まり。

（種村季弘、『迷信博覧会』、平凡社、1987年より。ただし〔 〕内の語句および一部のルビは問題出題者による。なお、*の「御一新」とは明治維新のことである。）

C

流行は与えられた範例の模倣であり、それによって社会への依存の欲求を満足させる。それは個々人の行動をたんなる一例にしてしまうあの普遍的なものを与える。しかも流行は、それに劣らず、差異の欲求、分化、変化、逸脱の傾向をも満足させる。流行は、今日の流行に昨日のまた明日の流行とは異なる個性的な刻印をうつ内容の変化によってこれに成功するのだが、それにもまして、流行はつねに階級的な流行であること、上流の流行は下層の流行と異なり、後者が前者と同化しはじめる瞬間に捨てられるという事実によって、成功を確実なものにする。したがって流行は、社会的均等化への傾向と、個性的差異と変化への傾向とを一つの統一的な行為のなかで合流させる、多数の生の形式のなかの一つの特殊な形式にはかならない。これまで内容の発展ばかりが探求されてきた流行の歴史を、社会的過程の形式に対して流行がもつ意味にもとづいて問いなおすとすれば、それは、この二つの対立する傾向の充足をそのときそのときの個体的社会的状態により完全に適合させようとする試みの歴史である。流行において観察されるいくつかの心理学的な特徴は、流行のこの本性に帰せられうるのである。

流行は、すでに言ったように、階級的区別の所産であり、そのようなものとして他の多数の階級的区別の所産、とりわけ、一つの圏を合併すると同時にその圏を他のさまざまな圏から隔離するという二重の機能をもつ名誉と同じような事情にある。一つの絵の枠が芸術作品を、統一的な、自己のなかに共属する、一つの世界それ自体として特徴づけると同時に、外に向かつては、空間的環境に対するあらゆる関係を断ち切るように、そして、このような所産の統一的なエネルギーはそれを内と外への二重の作用に分解することによってしか感知できないように、——名誉はその性格、とりわけ道徳的な正しさ——その階級の外に立つ人びとにはきわめてしばしば不正と感じられる正しさ——を、個々人はその名誉によって同時に彼の社会的な圏の名誉、彼の階級の名誉を表現しかつ維持する、という事実から得ている。こうして流行は一方では同等の地位にある人びととの結合、同等性によって特徴づけられる一つの圏の統一を意味し、他方では、ほかならぬそのことによって、

より下層の人びとからのこのグループの隔離、下層の人びとをこのグループに所属しないものとして特徴づけることを意味している。結合と区別はここで分ちがたく合一している二つの基本的機能であり、両者はたがいに原理的対立をなしているにもかかわらず、もしくはそれゆえに、一方は他方の実現の条件である(1)。流行が社会的な欲求の、そしてまた形式的心理的な欲求の所産にすぎないことは、即物的、審美的、その他の合目的性の関係のなかに流行形成の根拠がきわめてしばしばいささかも見いだされない(2) という事実によって、おそらくもっとも強力に証明されるであろう。一般に、たとえばわれわれの衣服はわれわれの欲求に即物的に適合しているのに反して、幅の広い上衣か狭い上衣か、^{とが}尖った髪型か平たい髪型か、多彩なネクタイか黒いネクタイかというような、流行がその合目的性の契機にする決定のなかには、合目的性は影も形もない。はなはだしく醜く厭わしいものがしばしば現代的とされる。それはあたかも、われわれが流行のためとあれば醜悪きわまるものも身につけることによって、流行がおのれの力を実証しようとしているかのようである。あるときは合目的的なものを、またあるときは混乱したものを、また別なときには即物的審美的に無差別なものを命じるその偶然性によって、流行は生の即物的な規範への完全な無関心をしめし、そうすることによって、他の諸動機、すなわち典型的社会的な諸動機を唯一の剰余として逆に強調するのである。

[中略]

流行そのものは一般的に普及しえないという事実から、個々人にとって、自分は流行によってともかくもなにか特殊で顕著なものを体現しており、しかも同時に、精神的には同じことを行なっている一つの全体に支えられているばかりではなく、その同じことを求めて努力している全体によっても支えられている、という満足感が生じる。したがって流行を身につけた人が出会う感情は是認と妬みとのあきらかに快い混和である。彼は個人として羨まれ、一つの^{うらや}類に属する人間として是認される。しかし妬みそのものもここでは特殊な色調をおびている。妬みの対象への一種の観念的な関与を含む妬みのニュアンスというものがある。富裕な人びとの祝宴を^{うかが}窺い見るときのプロレタリア*の態度が、ここでは示唆するところの多い一例をなしている。そこでは窺い見られた内容が、その主体的な所有とむすびついた現実から解放されて、純粹に内容そのものとして歎ばしい作用を及ぼす——ちょうど誰が所有しているかにかかわらず幸福感をあたえる芸術作品と同じように——ということが、その態度の基盤をなしている。一般に事物の純粹な内容とその所有者の問題とのこのような分離が（事物の内容をその存在から切り離す認識の能力に応じて）起こりうるということ、この事実によって妬みが現実化しているあの関与が可能になる。あるいはこれは妬みの一つの特徴的なニュアンスというのではなくて、妬みが生じるところにはかならず潜んでいる要素なのかもしれない。ひとが一つの対象物もしくは一人の人間を妬むとき、彼はもはやその対象物もしくは人間と絶対的に断絶しているのではない。彼と相手とのあいだにはなんらかの関係が生じたのであり、両者のあいだにはいまや、まったく異なるカテゴリーと感情形式においてではあるとしても、同じ心的な内容が成立している。妬みの対象物に対して、ひとは、それを所有しないことがわれわれを無関心にする

ものに対してよりも、近いと同時に遠い(3)。妬みによっていわば距離が、近さと同時に遠さを意味する距離が測りうるものになる、——無関心なものはこの対立の圏外にある。そのような距離によって、妬みはその妬みの対象物をかすかながらわがものにするのを含んでいる(失恋が含む幸福がこのようなものである)。そしてそれによって、しばしば、妬みの感情の最悪の頽廃をふせぐ解毒剤をもつことになる。流行の諸内容は、他の多くの心的内容のように特定の人には絶対的に拒まれているというのではないために、けっしてありえないわけではない運命の転換によって、さしあたりは妬んでいるほかない人びとにもそれが与えられる可能性があるために、妬みはこのような和解的な色調をおびる機会をとりわけ多くもっている。

(G・ジンメル、『文化の哲学』、円子修平・大久保健治訳、白水社、1976年(G.Simmel, *Philosophische Kultur gesammelte*, 1911)より。ただし〔 〕内の語句および一部のルビは問題出題者による。なお、*の「プロレタリア」とは無産階級、賃金労働者階級に属する者のことを言う。)

問 1

- (1) Cは読みにくい難しい文章ですが、そのなかで著者の社会学者G・ジンメルは、流行という現象の本質を、「結合と区別」という「分ちがたく合一している二つの基本機能」(下線部(1))としてとらえています。それが具体的にどういうことか、Aの文章に示された事例から適当な部分を抜き出して、わかりやすく説明しなさい。
- (2) 同じくCの文章の下線部(2)でジンメルは、流行形成における「合目的性の欠如」に言及しています。それが具体的にどういうことか、Bの文章に示された事例から適当な部分を抜き出して、わかりやすく説明しなさい。

問 2 Bに記述された現象のなかには、Cに示されたジンメルの理論では説明しきれない要素がいくつもあります。あなたが気づいたものをすべて、項目に分けて指摘しなさい。

問 3 Cの文章の下線部(3)において述べられている「近さ」と「遠さ」について、よりやさしい言葉で説明しなさい。

問 4 流行やブームはあなたの身の周りでも観察できます。また、テレビや雑誌によって知ることもできます。それらの中から流行やブームの事例を一つ選び、簡単に紹介してください。そして、それがいったいどのような社会的・心理的メカニズムによって起きているのか、あなたの考えを、根拠を示しつつ述べなさい。その際、Cの文章を参考にしてもかまいません。